



Michel Picard; and Robert E. Wood, eds.
Tourism, Ethnicity and the State in Asian and Pacific Societies. University of Hawai'i Press, 1997, 259p.

観光は今日の文化のダイナミズムを論じるために欠かせない切り口になつつある。2000年には7億人に達するだろうといわれる国際観光量もさることながら、観光が今日——アルジュン・アパドゥライが「文化のグローバル・フロー」と呼んだ人、技術、カネ、情報、知識のグローバル化——のなかで文化の生成とおおきなかわりをもっているからだ。

本書は、フランスのCNRS（国立科学研究センター）の人類学者で、インドネシア・バリの観光研究で顕著な業績をあげているミッシェル・ピカールとラトガス大学で社会学を教えるロバート・ウッドの編集した観光研究に関する論集である。人類学的視点からの観光研究の論集としては1977年に初版がでたヴァーレン・スミスの『ホストとゲスト——観光の人類学』以来いくつかのものが出版されているが、アジア・太平洋地域に光を当てているのが本書の特徴である。この地域は、今日、観光の成長ゾーンで、世界の観光客量においてこの地域が占める割合は1970年の3%から1991年には11.5%に上昇しており、2000年までに18%に達するだろうといわれている。ちなみに、この地域を訪れる主要な観光客はほかならぬわたしたち日本人である。

本書には8篇の論文が収められている。第1章はRobert E. Woodによる“Tourism and the State: Ethnic Options and Constructions of Otherness”と題する論文で、本書の序論的位置を占めている。ウッドによると、国家と観光とエスニシティは互いに深くかかわっており、観光、国家、エスニシティの関係はきわめて動的である。そして例えばマレーシアの国民文化とは、「マレーシア文化」として観光客に「売られる」ものを公式に抽象化したものにすぎないとさえ言えるという。そうした意

味では、編者の一人ピカールが論じているように、「観光文化」(touristic culture)こそ、今日のこの地域の国民文化の形成にとって統合的部分であると言っても過言ではあるまい。このスタンス、観光をエスニシティや国家との関連で論じるスタンスが、本書の理論面での特徴である。

第2章以下は、事例研究である。第2章ではTimothy S. Oakesが中国貴州のエスニック・ツーリズムを、第3章ではLaurence Wai-Teng Leongがシンガポールのエスニシティの商品化を、第4章ではJoel S. Kahnがマレーシア・ペナンのジョージタウンの「文化化」を、第5章ではJean Michaudがタイ山地部モンの観光と「文化的抵抗」を、第6章ではKathleen M. Adamsがインドネシア・スラウェシのトラジャのエスニック・ツーリズムを、第7章ではMichel Picardがバリの文化観光を、最後の第8章ではJocelyn Linnekinが太平洋観光と文化的アイデンティティの商品化を論じている。

これらの論文はそれぞれに興味深い問題を提起している。が、そのすべての内容をここでいちいち紹介する余裕はない。ここではわたしが関心をもってきたインドネシアのケースについてのみ簡単に触れておく。インドネシアに関しては、今述べたように、アダムズがトラジャについて、ピカールがバリについて論じている。バリとトラジャの観光については、わたし自身これまで調査し、研究も発表しているので、とりわけ興味深く読んだ。

トラジャはスラウェシ山地にあってユニークな文化伝統をもつことで知られる。そこに観光開発が導入されたのは1970年代のはじめだが、その展開にともなう、平地の民、とくに州都ウジュン・パンダンのブギスとのエスニックな対立をアダムズは描いている。トラジャ観光のガイドをウジュン・パンダンの非トラジャ人（ブギス人や中国人）が行なうことをトラジャ側はウジュン・パンダンによる搾取だといらだち、逆にウジュン・パンダンの方ではトラジャ人ガイドはガイドとして洗練されていない、プロフェッショナルではないとみる。そしてトラジャ人がトラジャ観光の成功を自分たちのほこるべき遺産の証しとみる分だけ、ウジュン・パンダンの方はそれをトラジャによる観光の政治化だとみるのである。こうして観光開発

の展開がエスニックなライバル意識の顕在化につながるわけだ。

バリの観光と文化の関係について、ピカールはこれまで精力的に議論を展開してきた。この論考もこれまでの議論の延長上にあるが、とくにオランダ植民地期、およびインドネシア独立後とバリにおける観光と文化というテーマを歴史的に検討し、スケールの大きなパースペクティブのなかで論じているのが本論の特徴である。こうした歴史のプロセスのなかで西洋人の視線のもとにバリが「バリ化」され、バリの慣習が問題となる場所は村から州のレヴェルに移り、さらに今日、バリの芸術は国民国家インドネシアの象徴とさえなっている。ピカールは、こうして、文化観光が国民文化と地域文化の形成とバリ人アイデンティティの創出につながるダイナミックな観光文化論を展開している。

この二つの論考は、本書のテーマであるアジア・太平洋地域において、観光、エスニシティ、国家の三すくみの関係を検討するうえで有益な事例となっている。すなわち、この地域において、観光開発は国家的プロジェクトとして展開され、エスニシティを再編成する機会となり、地域文化のダイナミズムを考えるうえで格好の枠組みを提供しているのである。

最後に、本書からは離れるが、わたしが最近(1998年3月)訪れる機会があった太平洋の小国パラオの観光のことに触れておく。1994年に独立したこの人口1万7,000人ばかりの小さな国は、「海の楽園」(世界有数の珊瑚礁とそこに群れる魚)を焦点とした観光を推進し、1997年には7万人をこえる観光客(約2万人の日本人、約3万人の台湾人、そして約1万人のアメリカ人など)が訪れている。問題は観光開発と自然環境のバランスである。私の滞在中、政府観光局が主催したワークショップでは「持続可能な観光」や「エコツーリズム」をめぐってホットな議論が展開されていた。さらに、観光関連の経済進出や労働市場の問題もある。というのも、日本や台湾から外資が導入され、ホテルやレストランといった観光セクターで働いているのは半分以上がフィリピン人など外国人労働者なのだ。

ここには、本書が検討している観光とエスニシティと国家という三すくみの関係をより大きくつつみこむ問題としてトランスナショナル、トランスリージョナルな人やカネの移動がある。この事実は最初に述べた今日の「文化のグローバル・フロー」のなかで「地域」とはなにかということをおぼろげに考えさせる。観光はそうしたグローバルな移動の一つの形態として新しい地域研究にとっての重要な切り口の一つにもなりうるのである。

(山下晋司・東京大学大学院総合文化研究科)

Daniel Fineman. *A Special Relationship: The United States and Military Government in Thailand, 1947-1958*. University of Hawai'i Press, 1997. 357p.

本書はイエール大学に提出した1962年生まれの本著者の歴史学の博士論文を出版したものであり、調査の行われた時期は1991~93年である。

近年タイの政治外交史を扱った英文の研究書の出版が相次いでいるが、それらの内容は玉石混濁である。関係公文書館・図書館での一次資料の徹底した調査や関係者へのインタビューを積み重ねたレイノルズの日本南進時の日タイ関係研究¹⁾や、アルドリッチの太平洋戦争までの米英タイの関係研究²⁾のように良質の成果が産み出されている一方で、主にピブーン時代を扱ったストウ³⁾やコープクア⁴⁾の著作のように、中途半端な資料調査のままに出版し、理解よりも誤解を拡大させる虞が大きいものもある。その中であって本書が前者に属することは疑問の余地がない。

1) Bruce Reynolds. *Thailand and Japan's Southern Advance, 1940-1945*. St.Martin's Press, 1994.

2) Richard J.Aldrich. *The Key to the South, Britain, the United States, and Thailand during the Approach of the Pacific War, 1929-1942*. Oxford Uni. Press, 1993.

3) Judith A. Stowe. *Siam Becomes Thailand: A Story of Intrigue*. University of Hawaii Press, 1991.

4) Kobkua Suwannathat-Pian. *Thailand's Durable Premier, Phibun through Three Decades 1932-1957*. Oxford Uni. Press, 1995.

本書のタイトルに用いられている「特別な関係」とは、米国とタイ軍部との特別に親密で相互依存的同盟関係のことである。その特徴は米国がタイ軍部の政治介入と抑圧傾向を強化し、一方、タイ軍事政権は米国の秘密作戦にまで全面的に手を貸して、米国に利益を与えるということにある。本書導入部の記述から著者は「特別な関係」は1947年に端を発し1980年代まで継続していると理解しているようである。「特別な関係」を著者が、タイがインドシナに派兵し、米国が膨大な軍事援助を腐敗して非効率なタイ軍部に注ぎ込み、タイが数万人の米軍の駐留を許し、また、米政府は抑圧的なタイ軍事政権を支援したことを例に挙げて説明しているように、著者の「特別な関係」論は主に58年以降のサリット・タノーム時代のタイ・米関係の実態を一般化したものである。

ところが、本書は「特別な関係」の最盛期でありタイ史におけるアメリカの時代であった60年代は直接の対象とはせず、その創始期と著者が称する47年からサリット革命の58年までの12年間を対象としている。著者はこの創始期に73年まで続く軍事政権の形態が造られ、外交政策も従来の柔軟性を失い米国との同盟に転換し、また、政府は次第に閉鎖的抑圧的性格を増したという。

著者はタイ米関係について自らのアプローチを既存研究と対比して、既存研究は冷戦モデルにとられ過ぎていると批判する。彼の批判では冷戦モデルは、両国関係を共産主義に対する安全保障という観点からしか視ず、そのため国際関係と国内政治とを切り離して国際関係面のみしか考察しないところに欠陥がある。冷戦モデルでは共産主義の脅威という国際的状況からタイは軍事政権であるか、民主政権であるかを問わず、米国との同盟を強制されたという前提から出発するので、タイの国内政治や政治形態がタイ米関係に与えた影響の重要性を見落とし、同時に米国がタイの国内政治に介入して操作したという側面を無視することになったというのである。著者は弱小国たる1940-50年代のタイは外部の圧力に弱く、米国からの圧力によって反政府派や少数民族への抑圧が強化され、また脆弱な政治基盤しかない軍人支配者が政権安定のために米国からの支援に依存しよう

としたと指摘して、タイ指導者自身の頭の中においても内政と外交は分離されていなかったと主張する。それ故に著者はタイ米関係の研究においてはタイ内政と対米外交との間の緊密な相互依存関係、すなわち「特別な関係」を実証的データに基づいて明らかにする必要があると説くのである。評者の見るところ、本書で紙数の半分を費やしている1947年から著者がタイ外交政策の革命の年という1950年までの記述においては、アメリカとクアン・アパイウォン政権やピブーン政権との関係について、既存研究にはない新事実が数多く提示されている。また、50年代のラオスに対するアメリカとタイ政府の諸政策も評者にとっては新知識であった。

ところで、著者は「特別な関係」論で47年から58年を首尾一貫して説明することに成功しているだろうか。評者は本書も相当のスペースを割いている55年以降のピブーンのアメリカ離れ・中国との関係改善外交や民主化政策を「特別な関係」で説明することは不可能と考える。60年代のタイ米関係の実態から一般化した「特別な関係」モデルを、無条件にその前の時代にまで遡って適用したことには元々無理があったと思われるのである。本書の理論的枠組みの有効性にはこのような疑問が残るが、本書の価値は、アメリカの影響力が最も強かった時代のタイ米関係を地の利を生かして徹底した資料調査を行い、実証研究として飛躍的に深めたことにあると考える。

(村嶋英治・早稲田大学大学院アジア太平洋研究科)

Eleanor Laquian; Aprodicio Laquian; and Terry McGee, eds. *The Silent Debate: Asian Immigration and Racism in Canada*. Vancouver, B.C.: Institute of Asian Research, The University of British Columbia, 1998, xx + 432p.

本書は、カナダ・バンクーバーのブリティッシュコロンビア大学アジア研究所 (Institute of Asian Research) が、1997年6月に主催した国際会議の内容を収録した論文集である。カナダはいわゆる移民国として、移民の受け入れを政策的に推進し、多文化主義政策をとる国である。だが、同国にお

いて、アジアからの移動者・移民の数が近年増加しており、しかも、多くの者が高度な専門性・技術や資本を持っていることから、カナダの人びとの間に、揺り戻しといった形で彼らに対する違和感、差別意識が広がっている。このアジアからの移動者・移民に対して、どういった形での対応が可能であるのか、その現状と課題を討議しようとしたものが本書であるということができよう。

本書の構成や収録された論文からは、アジア研究所が、カナダの状況を、現在の世界の状況のなかで重層的に理解しようとするねらいが見えてくる。カナダにおける古くて新しい「レイシズム」を考察するにあたって、移民の多い市のケーススタディをとりあげた論文、カナダの移民政策に関する検討を行った論文が収録されている。また、送り出し側であるアジアの状況に関する論文、他の受け入れ国の移民への対応を取り扱った論文も、比較の視点から全体の構成のなかに織り込んでいる。現在の人の国際移動を理解し、具体的な方策を講じていくためには、ローカル、ナショナル、インターナショナルの3つの視点が重要であることが、本書でも改めて確認されているように思われる。

こうした試みは、東南アジア地域の状況分析にとっても示唆的であろう。本書所収の論文、アジザー・カシム「東南アジア域内の人の移動 (Intra-regional Migration in Southeast Asia)」でも指摘されるように、現在東南アジア域内では、シンガポール、ブルネイが主要受け入れ国、フィリピン、インドネシアが主要送り出し国、マレーシアとタイが受け入れ国と送り出し国の両方の性質を持つに至っている。東南アジア諸国の人の国際移動めぐり、各国別の政策・状況記述ないしケーススタディは多く、アジザーの論文もそのレベルに留まっ

ているが、今後の東南アジア諸国、地域の将来を見据えていく上では、これらを結び付けた重層的な問題設定・分析が必要とされていくだろう。

また、現代のディアスポラという観点から興味深い論文は、ロナルド・スケルドンの「多文化主義からディアスポラへ (From Multiculturalism to Diaspora)」である。ディアスポラという言葉は、国外移住、国外離散を意味し、元来の用法では、ディアスポラの状況にある者は故郷から難を逃れて移動した被害者であるといったニュアンスが強かった。しかし、スケルドンは、現代のディアスポラ状況にある移住者のうち、高等教育を受け、財力の豊かなアジアからの移民、特にエスニック・チャイニーズ、インド人をとりあげ、彼らをもはや被害者ではなく、ローカルな、またリージョナルな経済の担い手となるグローバル・エリートとして位置づけている。彼らは、自分の出身であるアジア諸国・地域とのつながりを持ちつつたとえばカナダに拠点を置くのであって、これは、カナダに移住し、完全に定住する者を前提とした多文化主義に、新しい展望をもたらすものであるだろうとスケルドンは指摘する。

東南アジアにおいて、華人、インド系住民は、カナダよりはるかに長い移住者としての歴史を持っており、カナダのディアスポラには東南アジアからさらに移住した人びとも含まれる。こうした「旧」ディアスポラとカナダの「新」ディアスポラの関係と、それがカナダの多文化主義に与える影響についての考察は興味深いものになるだろう。また、東南アジア諸国における多文化主義の可能性を考える上でも、こうしたディアスポラに着目した指摘は参考となるのではないだろうか。

(石井由香・津田塾大学国際関係研究所)